注）本作品データは「縦書き」「ルビあり」等での表示を前提に制作されています。ご覧になる端末、機種の設定を確認、調整の上でお読みください。

プロローグ

窓から吹き込む春の柔らかな風に頬を撫でられて、うっすらと現実へと引き戻されていく。どこからともなく、ピチチと、鳥の鳴き声と羽ばたきが聞こえてきた。

ぼんやりと瞼を持ち上げれば、レースに縁取られた見慣れた天蓋が目に映る。

つい今まで何かとてもいい情景を見ていたはずなのに、なぜか一欠片も思い出せないことを悔いながら、夢半ばに半身を置いたまま、ゆっくりと上体を起こした。

視線を落とせば、お気に入りの毛足の長いスリッパがこちら向きに、履きやすいよう揃えられている。ベッドから下りてスリッパに足を通すと、サイドテーブルに新鮮な水が張られた洗面器が用意されているのが目に入った。習慣的に、機会じみた動作で顔を洗う。すると、当たり前のようにシルクのタオルが差し出される。

そうして寝ぼけ眼のまま、今度は髪を梳かそうと真横のドレッサーに腰掛ければ、ウェーブの掛かった長い髪は既に、いつものアップスタイルへと編み上げられていた。

やや怪訝としつつ振り返れば、襟元が開かれたハイウェストのドレスが。苦手なコルセットをなくし、パフスリーブも小さめな、最先端とも呼ぶべき上品な仕上がりとなっていて、基調は艶やかな臙脂を採用。羽根飾りと細かい白の刺繍が特徴的だ。

段々と覚醒していく意識を研ぎ澄ませていけば、おそらく先刻より忙しなく周囲を動き回っているのであろう何者かの気配が、ようやく、ほとんど微かに感じ取れた。

気づけば、前開きのネグリジェの結び目に、まさに手が掛けられようとして――

「っ……いいかげんにしなさいって、言ってあるで、しょうが!!」

ベレスフォード侯爵令嬢ジュリエットは、僅かの躊躇も斟酌もなしに、眼前に立つ不届き者へと、大仰な動作で溜めを作った平手打ちを食らわせた。

ばちーん！　と、小気味よい音が響き渡り、ぐらりと室内が揺れる。

睨み据えた先には、ネクタイに燕尾服姿の青年が一人。

「ああっ……お嬢様の愛のこもった朝の挨拶、今朝もしかと頂戴致しました。本当に感無量でございます」

盛大に殴られた後にも関わらず、第一声がそんな台詞。しかも気持ち悪いことに、二十代も半ばのいい年した男のくせに、若干頬を赤く染めているではないか。

さらに驚くことには、若い女性とは思えないジュリエットの怪力で壁に（それも派手に）叩き付けられたというのに、彼はとうに何事もなかったかのように再びジュリエットの前に立っていた。――懲りもせず、結び目を外そうとしながら。

「この変態！　今日で何度目だと思ってるの？」

すげなくそう毒づきながら腕を伸ばして不届き野郎をぐいぐい押し退けるも、

「七度目でございます。正確に申し上げますと、一五一時間と一二分三八秒です」

青年は、おおよそ朝には不釣り合いなほど爽やか過ぎる微笑を浮かべ（途中、「あ、今三九秒になりました」とか言って）、じりじりと迫って来る。

「お嬢様に毎朝こうして直にスキンシップして頂ける僕は、世界で一番の幸せ者なのでしょうね。七時が待ち遠しくて、四時からドアの前で待機してしまうほどです」

「……」

そうしてこの男は毎朝毎時この辺りから、その変態性に拍車が掛かるのだ。

「この平熱三六度二分の体温も、絹糸のように滑らかな亜麻色の髪の感触も、吸い込まれてしまいそうなぐらいきめ細やかな肌も、僕を虫けらのように見る菫のように可憐な淡い瞳も、華奢で小柄なお姿も……末代まで記憶しなくてはなりませんね」

「……はぁ」

始終こんな調子なものだから、ジュリエットはほとほと困り果てていた。

第一、末代まで〜のくだりは確か、〝恥〟に繋がるのではなかっただろうか。ある意味、末代までこんな扱いを受けるのであれば、立派な恥晒しにもなろう。

溜息一つ。改めて私室を見渡せば、閉じられた窓の外は肌寒さを思わせる曇り空。

隅には火の入った暖炉と、蓄音機。

光景から察するに、おそらく寒暖差の激しい春先ならではの気候を慮って、暖炉の火をご丁寧にも扇いで春風を装い、鳥の言動が録音されたレコードを流して春の陽気を演出していたらしい。……ジュリエットは自然、身震いした。

青年が早朝からそうした諸々の準備をしているなんて。許可なく入室して、だ。

「大体、毎朝毎朝どうやってこの部屋に入ってるわけ？」

昨晩は鍵を合計六つに増やしたはずだ。それも最後の一つはまだ一般に出回っていない特注品である。顔なじみの老舗業者に無理を言って作って貰ったのだ。

「それはお嬢様へのたゆまぬ愛で――」

「今日こそは真面目に!!」

白い手袋をはめた両手を胸に添え、恥じらうようにうそぶく彼に、ジュリエットはぴしゃりと言葉を被せた。すると彼は今度は一転、生真面目な顔になる。

「完璧な執事たるもの、解錠技術は備えておかなければなりません」

「っ!?」

執事ってそんな仕事でしたっけ？　という台詞をかろうじて呑み込む。聞いておきながらも、これ以上この青年の変態性について暴露されるのが怖かったのだ。

「密室でお嬢様に何が起こるともしれませんからね。僕も気がとがめますが、心を鬼にして任務に当たっているのです。これも全て、大切なお嬢様をお守りするためです」

任務て。執事ってそんな仕事でしたっけ？　ジュリエットは再び胸中で吐露した。

つまり彼を部屋に入れないという選択肢は、半永久的に失われたわけである。ちなみにあえて〝半〟と付けた理由は、死ぬまでは無理なのだということを示している。

「でも勝手に入られるのはやっぱり困るわ。せめてノックはして」

「ですがウィキペディアにも執事はノック無用と書かれていますよ」

「何の話？　とにかく……もう、いいわ」

突っ込み所は満載であるが、彼が自分を想う気持ちに偽りはないのだからと、ぐっと堪えて渋々そう呟くも、それでもジュリエットにだって絶対に譲れないものはある。

「でも、せめてドレスは自分で着させ――」

そう着替え、だ。しかしジュリエットの毅然とした言葉が最後まで紡がれることはなかった。代わりに「むぐうっ」と、気管が詰まったような声が漏れる。

「では歯磨きは僕にお任せ下さい」

パーティションの裏で着替えようと、まさに身を翻した途端。

神速で回り込んだ青年が、ジュリエットの口に歯ブラシを突っ込んでいたのだった。悪びれもせず、にこにこと笑って。

この一切の無駄がない動作に洗練された身のこなし、臨機応変な処理能力の高さ、そしてもはや芸術的な領域に達しているであろう気配遮断スキル。どれを取っても、どうしたって執事より刺客や暗殺者の類の方が向いているのではないだろうか。

「あのねえ！」

ともあれ叱責すべき所は明確にしなくてはと、ジュリエットは令嬢としてのマナーなどお構いなしにぺっと歯ブラシを床に吹き出して、青年に向かって指を突き付けた。

「お、お嬢様にご指名頂けるなんて光栄の極みでございます……っ」

もう床掃除を終えて新しい歯ブラシを手にしていた青年が、ぽっと顔を赤らめる。

「と、隣に座っても……？」

「……」

言葉を失う・二の句が継げないとは、まさにこんな時に相応しい慣用句である。果たしてこのたった三ページほどで、自分は何度「……」を遣っただろうか。

すっかり覇気を失ったジュリエットは、軽いめまいに襲われてベッドにへたり込んだ。するとその間隙を突かれ、あっという間にネグリジェからドレスに替えられて、歯磨きも済み、化粧を終え、ローテーブルに湯気の立つ朝食が運ばれてくる。

この青年には些か（以上）問題があるが、誰よりもいい仕事をするのは間違いない。ジュリエットの反応を楽しむ節はあるものの、例えば着替えやヘアメイクで自身に触れる際は一切の私情を挟まない。そればかりはジュリエットも認めざるを得なかった。

「さあ、お嬢様」

ジュリエットが未だベッドの上にいるからか、青年は半熟のスクランブルエッグを載せた銀のスプーンを彼女の口元へ向けていた。「あーん」とか言いそうな雰囲気で。

「ささ、お口を開けて下さいませ。お嬢様は貧血気味ですので、僕がお手伝い致します。もちろんヨーグルトには鉄分豊富な干し葡萄をたくさん入れてありますよ」

「……」

「豆知識ではございますが、健康のためには一口につき三十回噛むといいなどと、今ちまたでは噂されておりますよね？　しかしながらもお嬢様の身長と体重と体脂肪から割り出した僕の

綿密な計算においては、十七歳というう若きお嬢様の年齢を鑑みましても、今は好きに召し上がって頂いた方が精神衛生上宜しいかと存じます」

「……」

いつ、どうやって、一体この一週間でいつどうやって調べたのか。もはや犯罪の域。

「お嬢様？　どうかなさいましたか？」

にこにこと、青年は微笑んでいる。どうだといわんばかりのどや顔にも見えた。

前言撤回しようかなとジュリエットは思うも、疲れるので話題を換えることにした。

「……その呼び方も、止めてと言ったはずよ。私の名前はジュリエット」

容姿には未だ幼さを残すも、ジュリエットは立派に社交界デビューを果たしているし、何より父であるトマス・ベレスフォード侯爵が不在の今は、このベレスフォーダー州を一任された

女領主でもあるのだから。お嬢様扱いには我慢ならない。が、

「そ、そんなっ……いくら僕と同じ〝j〟繋がりだからといって、ジュリー&ジェリーなどおこがまし過ぎます……!!　ま、まるでカップル……いえ夫婦みたいですしっ」

なぜユニット名になる？　そしてそんな恥ずかしいカップルも夫婦もいない。

「……飛躍し過ぎよ」

ジュリエットはこめかみを揉んだ。そろそろ頭痛がしてきたのだ。

「確かに〝ジュ〟の次は〝ジェ〟なので、序列的には間違っておりませんが――」

そうして碧眼でちらりと、ねだるようにこちらを熱っぽく見つめてくるのだ。

青年の顔が超が付くほどに整っていなければ、とうに城から追い出していたかもしれない。茶のメッシュが入った金髪、中性的に綺麗な目鼻立ちは、何をしても様になってしまうから怖

い。そして仕舞いには何でも許してしまっている自分がまた怖い。

だからジュリエットはこの一週間、絶対にほだされるものかと誓い続けているのだ。

青年の名は、ジェレド・リヴス。

雇用されてより一週間目の新米ながら、ジュリエット専属の忠実な執事なのである。